令和５年度　海外派遣研究員研究報告書

令和６年６月１０日

日本大学理事長　　殿
日 本 大 学 学 長　　殿

所　　属　国際関係学部（国際関係研究所）
資格・氏名　准教授・高塚　浩由樹
■本報告書の内容を公表することは了承しております。
（公表可の場合，チェック■すること）

令和５年度海外派遣研究員（短期Ｂ）の研究実績を、下記のとおり報告いたします。

記

１　区　　分　　短期Ｂ
２　研 究 課 題

アルベール・カミュ『手帖』における事後的な修正と小説の創造との連関に関する研究

３　派 遣 期 間　　西暦２０２４年2月２９日　～　２０２４年4月１日
４　派　遣　先　　フランス（エクサンプロヴァンス、パリ）
５　研 究 目 的

1960 年 1 月、アルベール・カミュは自動車事故で亡くなった。21 歳の頃から死の直前まで、彼は日記と創作ノートを兼ねた合計 9 冊のノート（Cahiers）にメモを記録しており、それらは『手帖』（*Carnets*）というタイトルで彼の死後に出版された。従来、研究者たちは、作家の事故死によって遺された『手帖』を、カミュの人生と芸術の軌跡を示す「客観的資料」とみなし、伝記的な研究でも、各作品の着想から完成までのプロセスを探る研究でも、『手帖』を第一に参照すべき資料と位置づけ、『手帖』の記述を「証拠」とみなすことが、カミュ研究における「常識」とされてきた。しかし、『手帖』を構成する 9 冊のノートのうち、第 1 ノート～第 7 ノートまでにはタイプ原稿が存在し、生前、カミュは 1954 年にタイプ原稿に修正を加えていた。従来の研究で客観的証拠とみなされてきたのは出版された『手帖』の記述であるが、そこには、カミュによって後から書き換えられたメモや、自筆稿になかったのにタイプ原稿で新たに加えられたメモが含まれている。

本研究の目的は、カミュの『手帖』のうち、事後的な修正が加えられていた第 1～7 ノートに関して、①修正の内容を精査し、修正前の自筆稿の復元を試みること、そして、②カミュが 1954 年に行った『手帖』の再読と修正の目的が、当時構想中であった短編小説集『追放と王国』と、まだ着想直後の段階にあった自伝的小説『最初の

人間』の、構想の進捗ならびに本格的執筆のための入念な準備作業であったことを確認することにある。

6　研 究 概 要

『手帖』は、1962 年から 1989 年にかけて、3 巻に分けて出版された。その後、2006～08 年刊行のアルベール・カミュ新全集に『手帖』が収められることになったが、新全集における『手帖』のテクストは、カミュが後から加えた修正の内容を示す校訂版ではなく、従来の 3 巻本のテクストを踏襲したものであった。このことを受けて、高塚は 2009 年以来、カミュの遺族の許可を得て、『手帖』の原稿が委託されているフランスのエクサンプロヴァンス市立図書館で、『手帖』のオリジナル原稿とタイプ原稿の調査を行ってきた。特に、2014 年度からは科学研究費・基盤研究 C による補助を受け、2014～16 年度には「アルベール・カミュ『手帖』－オリジナル原稿の復元と新しいカミュ像の探究」、そして 2017～19 年度には「アルベール・カミュ研究 －『手帖』の修正から作品の創造へ」というテーマで研究を行い、さらに 2020～2023 年度の「カミュ『手帖』の生成研究－自筆稿復元の完成による資料的価値の再構築」によって、『手帖』に事後的に加えられた修正の内容を精査して、『手帖』第 1～7 ノートのオリジナル原稿の復元を完成することを目指した。

しかし、コロナ禍により、2020 年 4 月から約 2 年半の間、渡仏することができなくなり、研究は当初の計画より大きく遅れることとなった。今回の海外派遣研究員としての出張は、その遅れを取り戻すべく、パリ国立図書館でカミュの関連資料を閲覧した数日を除く約 4 週間をエクサンプロヴァンス市立ミッシェル・ヴォヴェル図書館における調査に費やし、以下のとおり、『手帖』の原稿だけでなく、これまで精査できないでいた「『裏と表』再刊のための序文」のタイプ原稿も詳細にチェックすることができた。この「序文」は、カミュが『手帖』の再読・修正を行ったのと同じ時期に執筆されたと思われるテクストである。

（今回閲覧した資料）

- 『手帖』第 1 ノートのオリジナル原稿・第 1 タイプ原稿・第 2 タイプ原稿
- 『手帖』第 7 ノートの第 1 タイプ原稿
- 「『裏と表』再刊のための序文」の 4 段階のタイプ原稿

なお、『手帖』の第 1 ノートでも第 7 ノートでも、カミュによる手書きの修正が加えられているのは「第 1 タイプ原稿」であり、「第 2 タイプ原稿」は『手帖』の出版を期した清書原稿である。後者にはカミュ本人による修正は加えられていない。

7　研究結果・成果

（1）1954 年：自伝的小説執筆の予告と『手帖』の修正

作家の事故死によって未完に終わった自伝的小説『最初の人間』の着想をカミュが得たのは、1953 年 10 月であり、着想時のメモは『手帖』第 7 ノートのオリジナル原稿に記されている。その第 7 ノートの使用を 1954 年 7 月に終えて以降、カミュは『手帖』第 1～7 ノートの再読と修正を行った。一方、1958 年に『裏と表』が再刊された

際、カミュが新たに付け加えた「序文」は、そのタイプ原稿に残された日付から、すでに 1954 年に書き上げられていたことが確認できる。そして、「序文」の 4 段階のタイプ原稿を閲覧することによって明らかになったのは、カミュが「序文」の中で予告している自伝的小説の執筆に関する記述の入念な推敲である。「序文」の中でそのタイトルは明言されていないものの、その小説は『最初の人間』に他ならない。要するに、『最初の人間』の着想を機に、カミュは『手帖』の再読と修正に取りかかり、それと同じ時期に、「『裏と表』再刊のための序文」で、1952 年夏のサルトルとの論争以降、長い執筆不能の状態にあった自分を鼓舞するかのように、自らの芸術の集大成となり、しかも新たな出発にもなる自伝的小説の執筆を明言していたのである。

(2)『手帖』第 1・第 7 ノートにおける修正の多さとその理由

上述したとおり、『手帖』の全 9 冊のノートのうち、カミュが事後的な修正を加えていたのは第 1〜7 ノートであり。そのうち、他のノートに比べて明らかに修正の数が多いのが、第 1 ノートと第 7 ノートである。この 2 つのノートでは、『手帖』のオリジナル原稿にないメモが、後から複数加えられている。この種のメモは、第 7 ノートでは主に短編集『追放と王国』と自伝的小説『最初の人間』の構想や草稿であり、第 1 ノートに後から加えられたメモは、『最初の人間』の遺稿で利用されていることが確認できた。

(3)『手帖』の再読・修正と『最初の人間』の執筆との連関性

たとえばアンドレ・ジッドの『日記』なら、作家が自分の日記を後から修正した目的は、公表すると自分にとって都合の悪い記述を改変するためだったとみなすことができる。一方、上記の（1）と（2）を勘案すれば、カミュの場合、彼が 1954 年に『手帖』の記述を修正した主目的は、当時、着想あるいは構想の段階にあった作品（『追放と王国』と『最初の人間』）の、構想の検討・修正・進捗であり、自伝的小説『最初の人間』での利用を期した新たなメモの挿入を含め、『手帖』の再読と修正は、新たな作品を創造するための準備作業だったと考えられる。

今回のフランス・エクサンプロヴァンスでの調査は、「『裏と表』再刊のための序文」の原稿と『手帖』の第 1・第 7 ノートの原稿の精査を行ったところで時間切れとなった。カミュが事後的な修正を加える前の『手帖』第 1〜7 ノートの復元は、今回の調査で確認できた修正の内容を反映しつつ、できるだけ早く完成させる所存である。

一方、『手帖』の再読・修正と『最初の人間』の執筆との連関については、2024〜26 年度の科学研究費・基盤研究 C「アルベール・カミュ『最初の人間』－その生成研究の再構築」で、『最初の人間』の遺稿と、『最初の人間』の執筆のためにカミュが作成・使用していた 3 つの創作ノート（1956 年に作成が開始されたと思われる「『最初の人間』のための材料（エレマン）」というファイル、1957 年から使用された「黄色の手帖」および 1959 年 11 月から使用された「青の手帖」）を調査することによって、さらに詳しく明らかにしていきたい。

以　上